

Series. 火薬製造所 vol.9

オープン！史跡公園(仮称)デジタルミュージアム

プログラムの概要

日時：令和8年3月14日（土）午前10時から午前12時まで

形式：講義＋巡検

会場：板橋区立第五中学校ランチルーム、史跡「陸軍板橋火薬製造所跡」加賀公園・旧野口研究所

講師：学芸員 杉山宗悦

TOPPAN 株式会社 デジタルミュージアム担当者

応募者数：72名

参加者数：26名（4名欠席）

今回も定員を超える応募があり、抽選となりました。たくさんのご応募ありがとうございました。また落選されたみなさまには、ご希望に添えぬ結果となりましたが、何卒ご了承ください。



板橋区史跡公園(仮称)デジタルミュージアム

<https://www.itabashi-digital-museum.jp/>

企画の趣旨 （講座ホームページより）

この春、“板橋区史跡公園（仮称）デジタルミュージアム”をリリースします。

デジタルミュージアムは、令和11年度に国史跡「陸軍板橋火薬製造所跡」を保存活用して整備する予定の史跡公園と並行し、オンライン上で多様な利用者が史跡を知り、体験し、研究するためのオンライン上のプラットフォームです。デジタルミュージアムは何ができるのでしょうか。史跡そのものと組み合わせることでどんな新しい発見が生まれるのでしょうか。

本講座はデジタルミュージアムを開発したねらいや楽しみ方についてのレクチャーと、史跡現地の見学を通して、デジタルミュージアムの可能性を考えます。

当日の行程

09:00 職員集合、セッティング

09:40 受付開始

10:00 開会、挨拶

～第1部 デジタルミュージアムを体験する～

10:05 史跡公園整備事業とデジタルミュージアムの開設のねらい
工都板橋と TOPPAN 株式会社

10:20 デジタルミュージアムの基本的な操作実演と体験
「デジタル史跡探索」機能と「デジタル展覧会」機能
デジタルミュージアムの今後の展開について

11:10 質疑応答、休憩

11:20 第一部終了、加賀公園まで移動

～第2部 史跡の本物に触れる～

11:30 加賀公園と旧野口研究所の遺構・建物の観察

11:55 質疑応答

12:00 終了

方法

デジタルミュージアムは、デジタルとリアルを組み合わせることで、より深く史跡そのものにアプローチするねらいがあります。

それを踏まえ、デジタルミュージアムの体験と史跡現地の見学会を行う2部構成を採用しました。

【第1部】

参加者にパソコンやスマートフォンなどのデバイスを持参してもらい、実際に操作しながらデジタルミュージアムの操作方法からその楽しみ方を体験しました。その際、遺構や建物の見どころをポインティングし、第2部の見学に接続することを意識しました。



【第2部】

デジタル上で鑑賞した遺構や建物を、現地でじっくりと観察しました。オンライン上では味わえない雰囲気や、視覚からは得られない情報にも注目しました。



主な内容、当日の様子

なぜ、今デジタルミュージアムなのか？

現在、私たちは、デジタルに触れない日がないほど、デジタル技術が生活の中に浸透しています。

それでは、どうして今、史跡公園(仮称)デジタルミュージアムをリリースするのでしょうか。主に3つの理由があります。

①遺構と建物を今、届けたい

令和11年度の史跡公園整備までの期間、未整備地区にある遺構や建物は、どうしても公開の機会が限られてしまいます。現在の様子をたくさんの方に見てもらう方法として、デジタル技術を活用することにしました。

②調査研究成果の発表

史跡公園整備の準備のために、学芸員は10年以上、史跡に関する調査を行なっています。その成果は展示や講座などで紹介してきましたが、よりフレキシブルに発表できるプラットフォームとして、デジタルミュージアムを設計しました。

③リアルとデジタルを組み合わせる

リアル(現物・現地)とデジタルは、それぞれ特徴を持っており、二者択一の選択ではないと考えています。その長所を見極めて、リアルでしか/デジタルでしか体験できないことを組み合わせると、私たちの世界の見え方が豊かになるはずです。



デジタルミュージアムの楽しみ方

令和7年春から制作を開始したデジタルミュージアムは、まず令和8年3月に「デジタル史跡探索」と「デジタル展覧会」の2つのコンテンツを搭載するかたちでリリースしました。講座では参加者にパソコンやタブレットをご持参頂き実際に操作しながら、それぞれのコンテンツの楽しみ方を味わいました。

史跡が「引き立つ」体験

デジタルミュージアムの使い方をレクチャーした後は、会場のお隣にある国史跡「陸軍板橋火薬製造所跡」の現地に移り、パソコンやスマホから離れ、本物の遺構と建物を鑑賞しました。

加賀公園では発射場の射塚、旧野口研究所では弾道管と燃焼実験室などを見学しました。参加者は遺構の広さや大きさ、素材、音が響く部屋の様子など、デジタルでは味わえない史跡の細部にまで注目していました。史跡がもつさまざまな情報が引き立つ体験でした。

現地ならではの雰囲気

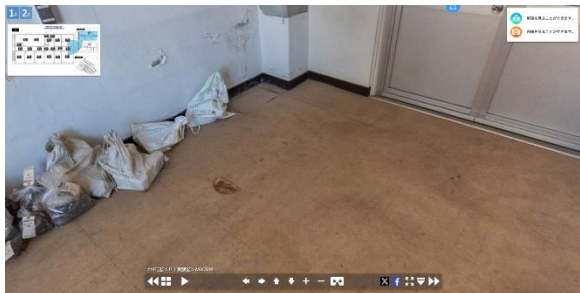
参加者の皆さんと加賀公園を訪れると、築山で遊ぶ小学生たちと出会いました。遺構を見学する私たちとその周りを駆け回る小学生。すこし珍しい組み合わせです。

子どもたちに挨拶をしてから「露天式発射場射塚」の解説を始めると、子どもたちもこちらの様子が気

になる雰囲気、自然と会話が生まれました。初めはすこし驚きましたが、これが普段の史跡なのだと思います。デジタルでは感じられない現場の雰囲気を改めて味わう機会になりました。

あとがき

「この床のシミは何ですか？」



燃焼実験室のある部屋の説明をしているとき、参加した小学生に質問され、私はたじたじになってしまいました。その部屋の床に、赤くサビついたシミがあります。床は戦後に作られたPタイルですから、歴史的な利用を示す痕跡ではありません。そのため、私はそこにシミがあることすら、認識していませんでした。

なぜ彼女はそのシミに気づいたのでしょう？もしかしたら、デジタルミュージアムはその一因かもしれない、と質問に答えながら感じました。

デジタルミュージアムは広い空間をひとつかみに認識することのできる存在です。

彼女はデジタルミュージアムで初めて訪れる史跡の全体像を掴みました。そして現地では、現地でしか感じるできないものに集中したのかもしれない。

結局、私はシミにまつわる上手い答えを見つけられないままでしたが、これから始まるデジタルミュージアムの未来を改めて思う対話になりました。(学芸員)



作成

令和8年3月27日

板橋区教育委員会事務局史跡公園担当課・生涯学習課

※本資料の複写、複製、二次利用は私的使用を目的とする場合に限りません。